河本英夫先生を送る

三重野　清　顕

二〇一七年に本学文学部哲学科に着任して以来、私は折に触れて、河本先生から様々なお話を伺う機会に恵まれた。長いようであっという間であったが、その話題は実に多岐にわたった。ほぼ最初の専任職であった私は、大学という組織の仕組みや業務の進め方等についても多くを学んだ。ここでしか聞くことのできないであろう、かつての哲学者達についての回想もあった。学問や世界情勢の今後の展望にも、先生の話は及んだ。コロナ禍以降は、残念ながら機会は格段に減ってしまったが、私の抱えている課題について貴重な助言を頂戴することもあったし、先生自身の哲学的構想について伺うこともあった。中でも、「吟遊哲学」というテーマが印象深かった。書斎の中ではなく、あてどない旅において語り出される哲学はどのようなものかと興味をそそられたのを思い出す。思えば、哲学の原理的考察や現実性のさまざまな領域を対象とした論考と並んで、旅の途上で紡がれた思索の記録が、先生のお仕事の重要な部分を占めていたように思われる。

先生のご業績については、改めて語るまでもないであろう。毎年目を瞠るほどの業績が繰り出され、学外での華やかなご活動の様子も盛んに聞こえてきた。その一方で先生は、教育の重要性をしきりと説かれ、嬉々として（と私には見えた）熱を帯びた学生指導を行うとともに、学内でのさまざまな業務にも積極的に取り組んでおられた。「国際哲学研究センター」長として采配を振るうとともに、大学院の哲学専攻長も長年にわたって務められ、途方に暮れるような問題についても、てきぱきと対処される姿が印象に残っている。隣にある河本先生の研究室には、先生を慕う

多数の学生たちが、絶え間なく訪問している様子であった。先生の思考や語り口には、人を否応なしに惹き付ける魅力と、そこに飲み込まれて破滅に至りかねない危うさの両面が感じられた。

先生の哲学的営為を一貫していたように思われるのは、固定された現実の背後に生成的な活動を見出し、その運動性が現実を形成しているさまを記述する営みであった。これは先生自身、シェリングの言葉を借りて言われるように、いわば超越論的な過去の領域への遡行とも言える。しかしこの遡行は同時に、未来へと向けて、複数の可能性の選択肢を新たに開いてゆくという倫理的な要求への応答でもあった。そこには人間の可塑性に対するきわめて強い信頼があり、そのための資源は何であれ上手く活用し、先生の言葉では「経験を動かしてゆく仕組みを獲得すること」が重視された。ひるがえって、言語というものが現実をとらえるにはあまりにも粗いこと、言語に囚われることで可能性を狭めてしまう危険について、河本先生は繰り返し警告してきた。その際、河本先生は一見過激で挑発的な表現も辞さなかったから、反発を惹き起こす場面もあったことと想像する。ただ、言語に由来する対立の支配のもとで苦しんでいる人々にとっては、先生の言葉はしばしば救いともなりうるものであったと思う。

業務の多忙から解放され、人生の新たな局面を迎えられた先生の哲学的な旅は、どこへと向かうのだろうか。その今後の展開を、愛読者の一人として楽しみに見届けてゆきたいと思う。

河本英夫先生、これまでどうもありがとうございました。先生のご健康とさらに充実したご活動を祈念いたします。